

8月4日(月)～6日(水) 梓川地区・御浜町ふれあい交流会が行われ、リーダー研修会の参加児童の中から小学校5・6年生22人が三重県御浜町を訪れました。



▲御浜町で様々な体験をした児童たち

三つ目は、おたがいの文化を伝えあえた事です。ぼくたちは海水浴をしたり、御浜町のミカンや、魚介類を食べました。代わりに、部屋でリングゴの事や山の事を教えました。来年はぜひ、長野のリングゴや山を体験して欲しいです。

二つ目は、あいさつがすっかりできました。役場の人や同じ旅館の人、御浜町の人に、すっかりはつきりと言えたので、良かったです。

よくは、この御浜町・梓川ふれあい交流会に参加してよかった事が三つあります。一つ目は、御浜町の人と仲良くなれた事です。今回の目的の一つだと思っので、新しい友達が増えて良かったです。よくから最初に話しました。「よろしく」と相手も言ってくれたので、うれしかったです。

参加児童の感想文(抜粋)
しっかりとしたリーダーになるために
石田佳吾

● 岩岡神社の太石 ●

地域には昔からの言い伝えや、受け継がれる伝統がありますが、岩岡神社拝殿の隣には一塊の「石」があります。この「大石」は、昭和二十四年七月に発生した梓川の大洪水により、倭橋と中央橋の間地点に砂利の中から突如出現し、当時の住民の大変な話題となった石です。その後、地区の氏子総代の発案により、この石を岩岡地区住民の安住と繁栄を祈願する「神石」として神社に祭ることになりました。

そして、昭和二十六年八月に、梓川の渇水期を利用して河原から堤防上まで「万力」と「神楽棧」を使って引き上げ、そこから岩岡地区住民が約1kmを牽引し、現在地に安置しました。安置後に



は、梓川の洪水を鎮めることを祈願して、水神である「瀬織津比賣」の神様としても祭られました。また、この事を後世に伝えていきたいとの思いから、今年八月に由来などを記載した銘板が設置され大宮熱田神社山田宮司より奉納して頂きました。

私は、今回の梓川地区・御浜町ふれあい交流会で本当にいろんな「初めて」を体験しました。まずは竹とんぼ作りです。竹とんぼを作る先生「山ちゃん先生」は軽々と竹を削って作っていたので、最初は案外簡単なのかな、と思っていたけれど竹がたたく、うまく削れなくて難しかったです。

いろいろな事を教わった御浜町交流会
永原里菜

（だけど、みんなと竹とんぼを飛ばしたらすごく飛んだので楽しかったです。次の日は「大地くじら博物館」に行きました。最初はくじらの説明などを聞きました。くじらの知らなかつた事をたくさん教わって勉強になりました。その後は、くじらにエサをあげました。魚を投げたらすごく大きな口を開けて食べていて面白かったです。

氷室公民館納涼祭

八月十四日(木) 氷室地区において「納涼祭」が開催されました。

朝は小雨模様で天候が心配されましたが、予定通り十九時に、盆踊り大会を皮切りにスタートしました。

子どもたちは金魚すくい、ボンボン釣り、花火大会とどれも楽しそうにはしゃいでいました。大人たちも生ビールや酎ハイ、おつまみを片手に地区の交流を深めていました。



▶子ども花火大会

最後は恒例のビンゴゲームで盛り上がり、今年も大成功



▲ボンボン釣り

な納涼祭でした。

「納涼祭」は氷室公民館の主催によって毎年行われている地区の一大イベントです。「納涼祭」に対する思いや終わっての感想を田多井副公民館長に伺うと「昨年同様大勢の方に参加頂き、盛大に行うことが出来ました。近年氷室地区は若い方の世代が増え、公民館行事にも積極的に参加して頂いております。そんな中、地区行事である納涼祭は幅広い世代の良い交流の機会となっているように思います。」と話されていました。参加された地区の皆さんをはじめ、準備にご苦労を頂いた役員の皆さん全員笑顔が印象に残る納涼祭でした。

文化財紹介 No.2

知っていますか! 岩岡氏館跡

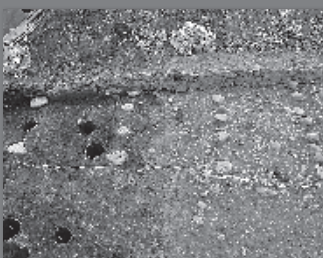
南大妻地区に「岩岡氏館跡」と伝わる一画があります。梓川左岸の段丘上に位置するこの地には「内堀」という字名が残っており、現在は民家や水田が広がっています。岩岡氏はもともと武田氏の家臣でしたが、その後小笠原氏に従い、小笠原貞慶が深志城(松本城)を奪還する際にこれを助けます。その戦功を賞され、岩岡の地に領地を与えられますが、この時居所として築いた館が内堀の地にあつたと考えられています。

今年の五月から六月にかけて、水源地の試掘に伴い館跡推定地の南側で発掘が行われました。この周辺は「寺屋敷」と呼ばれ、館に隣接して寺院があつた可能性もありますが、発掘の結果、寺の存在を直接示す証拠は得られなかったものの、礎石を伴う建物跡や掘立柱建物跡、土鍋が出土した穴など戦国時代のさまざまな遺構が見つかりました。礎石のある建物は南北四間・東西二間以上の大きさで、礎石と礎石の間には床を支える石が並べられていました。また、これらの遺構からは素焼きの皿や土鍋のほか、銭や青磁碗などの中国産の遺物も出土しています。

館跡本体の発掘はまだ行われていませんが、その隣接地から同じ時代の遺構や遺物が発見されたことは大きな成果と言えます。今も地中に眠るこの遺跡は、戦国時代の梓川地区の様子を後世に生きた私たちに伝えていきます。



▲土鍋(内耳鍋)



▲礎石のある建物跡

雑記帳

梓川の地に居をかまえて五年目を迎えました。

実は、梓川には母親の実家があり、幼い頃よく遊びに来ていたものです。その地に住み着くこととなったのは本当に「縁」があつたのだと思います。

この四年の間に様々な出来事がありました。最も大きな出来事は、やはり子どもが生まれた事でしょう。

長女は三歳になり段々と生意気になってきました。最近「パパ嫌い」を連発する事もしばしばです。長男は生後三カ月。生まれた時の体重が三九四〇グラムの大きな子で将来が楽しみです。

自分の仕事の性質上、相手に対して厳しい態度で臨まなければならぬ事も多く、毎日が激しいストレスとの戦いです。

一日の仕事を終えて帰宅し妻と子どもたちの顔を見るのが何よりの癒しとなっております。その度に自分が家族に支えられていることを実感します。

これからも、家族を支えられ、家族を支えて毎日を過ごしていければと思います。

